顕彰会便り

No. 8
平成2年(1990)9月1日
編集・発行
津田左右吉博士顕彰会
(美濃加茂市太田町3425-1
TEL0574−25−4141)

画期的だった
津田左右吉博士伝記資料展

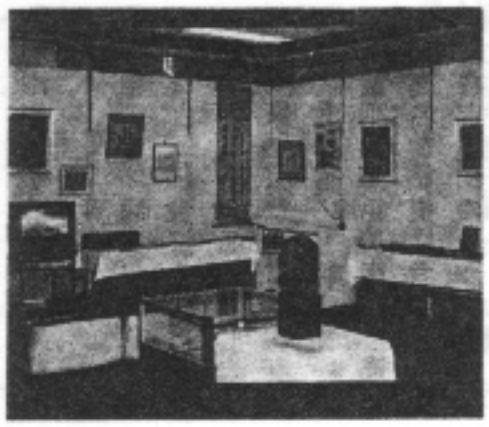
本顕彰会が発足して満六年の去る平成二年二月九日から十五日までの七日間、市立図書館で津田左右吉博士伝記資料展を開きました。

これは、これまでの顕彰会活動の集大成ともいえるもので、また日本中でも最初の本格的な津田左右吉展として、美濃加茂市教育委員会と共催しました。

博士の遺徳をしのび美濃加茂市にとどまらず広く岐阜県下から四百名ほどの人々が訪れ、新聞や市広報で話題となり関心を呼びました。

展示された資料は、博士の母校早稲田大学から青年期の日記や、岩波書店から出版法違反事件にかかわる裁判関係書類のほか、博士の知人や弟子が所有している肉筆原稿、書簡など各方面からご協力いただき資料を展示しました。

また、早稲田大学での博士の教え子で博士とつながりの深い歌人の水野美知（みずのよしとも）さんによる講演会も会期中に開きました。



本顕彰会では、訪れた人に津田博士がどんな精神で学問研究に取り組んでいたかを説明したり、郷土とのかかわりを話したりして本会への入会を呼びかけました。

今回の資料点数は百四十二点にのぼり、これら資料の紹介や資料所有者とのご縁を大切にして、今後の顕彰会活動に生かしてゆく予定です。

平成元年度事業から

初めての 津田博士の児童劇

平成元年十一月二日下米田小学校で学習発表会があり、四年生の児童が博士の自叙伝「子供の時のおもひで」などを参考にして劇を発表しました。

このように演劇で津田博士を紹介するのは初めてのことで、四年生が取り組んだのは博士の生家に四年一組の井戸英敬君が住んでいることもあり、当時の家のまわりの様子や小さい時から多くの本を読破した博士の少年時代を着物姿で演じたり博士の代表的な著書を紹介したりしました。

新美南吉 顕彰会との交流

去る平成元年十一月十四日人物顕彰会活動の先進地である半田市の新美南吉顕彰会を訪問し南吉資料館と南吉文学コースを見てまわりました。

① 南吉生家の管理
② 南吉文学コース、ガイドブックの発行
③ 南吉文学の研究、資料収集
④ 南吉文学講座、講演会開催など、部会ごとに活発な活動がなされていました。

南吉顕彰会からは、現在小学校の教科書にも載っている人気童話作家新美南吉と違って、高名な歴史学者である津田左右吉博士のような偉人をどのように顕彰しておられるかと質問があり、青少年の学問への励みとなるようにと、津田賞制度(「津田賞少年の作文発表会」)を中心にした活動を紹介しました。

南吉生家前にて

「津田賞」入選者

平成元年度の津田賞は、小学校五・六年生の部に七九一名、中学生の部に二二五名の応募がありました。お世話をお掛けした学校関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

なお平成元年度から美濃加茂ライオンズクラブ管内の坂祝町、富加町の小学校、中学校(双葉中は始めから)へと対象範囲を拡大しました。

○小学校五・六年生の部

最優秀賞

「梨の改良を」 佐口耕樹(山之上小五年)

優秀賞

「弱い自分をうち破って」 坂井 亜実(坂祝小六年)
「しょうらいのゆめ」 山本真美(下米田小五年)

佳作

「わたしはこんな人になりたい」 渡辺 佐苗(古井小六年)
「ふるさと」 林 容子(太田小五年)
「緑の多いぼくのふるさと」 村瀬 友良(蜂屋小五年)
「わたしはこんな人になりたい」 神谷 和代(伊深小六年)
「ふるさと」 吉村 文江(山手小六年)
「ふるさと」 市原由紀子(三和小五年)
「母の夢を」 高井いづみ(富加小六年)

○中学生の部

最優秀賞

「私は保健婦になりたい」 山田 順子(双葉中二年)
「私の将来」 小島 朋子(坂祝中一年)
「佐口佐太郎さんに学ぶ」 山田 美穂(東中一年)
「私の将来」 中野 妙美(西中一年)
「私の夢」 石原 智美(双葉中一年)
「私の夢」 伊藤 留奈(西中二年)
「私の将来」 野呂 香織(西中三年)

※以上学年は平成元年度当時

津田賞表彰式

津田左右吉博士伝記資料展に記念講演を委嘱されて美濃加茂市に赴く

水野 美知

○おほけなくわが引き受けし講演の師の思い出は何を語らむ

○全集の第十五巻巻頭の写真の我は学生服か

○訳尺して師がみ教へを賜りし有為のあまた鬼籍に入れり

○五十有余年は過ぎてありし日を語り合はむに残るは誰ぞ

○学問に背きて生きし悔恨の消えがたき身を語らむかいま

○逝きまして二十九年故里の師が踏みし土われも踏みてむ

○津田藤馬之墓と苔むす一基こそ師の父君の眠らせたまへ

○津田勢以之墓と細身の鋭き文字ぞ母君の碑は先生の筆

○師の生家いまに残りて年を経し大き山茶花くれなゐに咲く

○少年の日に先生の登りしと幹くねらする古りし柿の木

○大公孫樹・羽掛の社・愛宕山師の思い出の中の風景

○大き師のみ業蹟ざを偲び称ふると建てし記念碑かりそめならず

○原稿を目に描かしめ岩彫りて八十八枚積みあげし塔

○しみじみと今にして知る温かき師のはげましの深き味はひ

○先生にめぐり逢ひしは生涯の我にかかはる事なりしかな

平成二年度 事業からのお知らせ

☆津田左右吉博士顕彰会の会費は年間五百円で、今年は八月に会費の納付時期となります。

☆第六回「津田賞」少年の作文発表会を十二日八日（土）に美濃加茂市中央公民館で開催します。

とくに今回は、教材用として津田博士の紹介用ビデオ(注)やスライドを各小学校・中学校へ寄贈して、博士の郷里との関わり、博士の偉大な学問の業績など、いつでも博士のことをよく知ってもらえるよう計画しています。

（注）これは去る平成元年八月十二日放映の名古屋テレビ「歴史ウオッチング」という番組で制作された『古代史研究の先駆者～津田左右吉』の録画ビデオです。

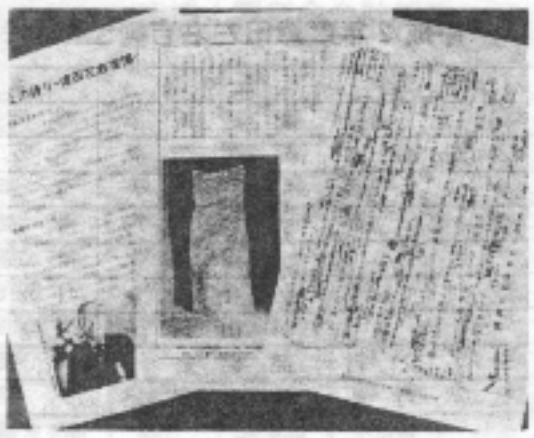
名古屋テレビ番組制作ロケ風景

☆津田博士をわかりやすく紹介したパンフレットと博士の学問の尊厳のために骨身を削る苦心で記述された肉筆原稿用紙（印刷物）をセットにして会員に配布します。

会員以外でもご希望の方に無料で配布しますので、顕彰会事務所までどうぞ。

☆津田博士の郷里に残る伝記資料の紹介、博士についての聞き取り調査など郷里の調査研究活動をすすめ冊子として継続的に発行する予定です。

これら資料をできるだけていねいに多く紹介することにより、親しみのある博士のお人柄や学徳を現代に生かしてゆきたいと念じ、本年度その編集委員会を発足させます。



パンフレットと肉筆原稿用紙

☆来る九月（日時は未定）、東海市荒尾町にある市立平洲記念館を訪問し、平洲顕彰会と交流を予定しています。

細井平洲（ほそいへいしゅう）は江戸中期の儒学者。平洲祭、記念講演会、つどいの開催などの顕彰会活動の様子や記念館・図書館・小学校にある細井平洲像などを見て回ります。

対象は会員全員ですが、一般の方の参加も歓迎します。

参加費は昼食代等二千円程度、申込など詳しいことは顕彰会事務局まで。

☆本顕彰会設立以来の念願である津田博士の胸像建設については、これまで役員会・理事会等で継続協議され、顕彰会予算の中でも胸像積立金として特別会計に計上されてきました。

本年度は建設に向けて具体的な第一歩となる胸像建設委員会を設置することになりました。

今年一年間かけて、委員の選任、建設委員会による具体案の作成（建設時期、場所、予算）などが審議されます。

博士の高弟栗田先生

尾関　公見

私が初めて津田博士の宅を訪問していろいろご教示を賜った時、「先生には数多くの高弟がおありでしょうが……」とお尋ねしたところ、「栗田直躬君ですよ」と唯お一人だけをご紹介下さいました。

その後手紙で挨拶したり、種々懇切丁寧なご指導を受けることができ、また貴重な博士から頂かれたご両親の遺品を数点、当方へご寄贈下さり感激でした。

名誉市民推戴の際お伴をしてお出で下さったのが初対面でしたが、博士に対する先生の言葉遣い、御態度などが極めていんぎんであり丁重であることにびっくりしました。また就寝の時も「私はこちらで休ませていただきます」と言って控えの間である僅か三畳の部屋で床をとられましたが、師弟の間の礼節の正しいことに驚嘆しました。

「三尺さがって師の影を踏まず」という古語がありますが、それ以上に真摯（しんし）で献身的にお尽くしなさったことを数項述べてみます。

一、数多くの著述の校正を何回も担当されました。最初の頃の序文には栗田君を煩わし……とありますが、後には栗田先生の地位の高めるにつれ栗田氏と改めて記してあります。

一、出版法違反の件で公判中は一年間も学校を休み、特別傍聴人として博士に付き添われ、また関係方面に対する交渉を続けられました。

一、戦時中も武蔵境へ御転居後も常に出入りして、著述関係のことは勿論家事の総てについてお骨折りになっておられます。北軽井沢の別荘へ避暑にお出掛けの時も必ず送り迎えにお伴をなさったのであります。

一、博士の重症で入院、手術の際にも万事引き受けて手配され、耐病生活を支えられました。そして米寿祝賀会、ご逝去、葬儀と連続でしたがその間主軸となってご努力なさっておられます。

一、逝去後発刊された著書も先生のお骨折りで出版され、大事業である全集発行の際には編集責任者として東奔西走し、その画策によって斬新な全集が完成され学界に大きな貢献をされました。私ども全く素養のない者にも御苦労が伺われる大事業でした。

この度の全集の再版で書簡が二冊追加されましたが、これは博士の人柄が分かる貴重な文献であります。収録書簡九一四通のうち、栗田先生宛五九八通の多数であること、その内容を見ても如何に信頼されていたかが分かります。

佐藤美和子さん宛書簡に「栗田君には何もかも厄介になっています。僕の生活は栗田君のおかげでできているようなものです」と述べられています。

栗田先生は郷里水戸に先祖からの墓域はある由ですが、平林寺に博士の墓地を設定する際に、地続きに栗田家の分も入手されましたが、後継者のない津田博士を最後まで永遠に見守ろうという考えが伺われて、世上にもまた史上にも例のないうるわしく崇高な師弟のきずなに感嘆せずにはおられません。

栗田先生は明治三十六年生まれで今年八十七歳、博士が御帰郷になったときと同年配ですが至ってお元気でご活躍中です。益々御健康でご長寿を祈念して筆をおきます。